



TITLE:

米洲行日誌(8)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 米洲行日誌(8). 天界 1937, 18(201): 87-94

ISSUE DATE:

1937-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167587>

RIGHT:

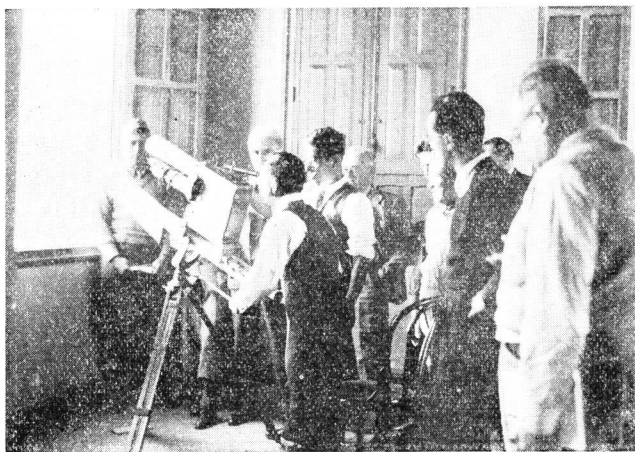
米 洲 行 日 誌 (8)

京都帝大教授 山 本 一 清

1937年6月4日(金曜日)

天気は、朝のうち曇り、午後に晴れ、夜に又曇りといふわけで、未だ心配である。今日、デアンデラス中佐からクロノグラフを子午線室に借りることにした。シメンス製のもので、ペンが3本あり、甚だ新しく、使い易いものである。

柴田、堀井兩君は今日から練習かたがた太陽面の寫眞を撮り始める。尚ほ我が日本隊の設備は殆んど完成したので、今日16時を期し、全體として日食觀測の練習をすることにした。ペル1隊の全員を「招いて見學せしめることにした



山本博士の操作を見學するペル1隊の人々

ので、定刻までにガルシヤ隊長始め、ロセンブラト教授、ロタルデ大佐、デアンデラス中佐其他數名、打ち揃つて來觀した。我々は三人のほかに、清廣

氏が自分の活動寫眞のハンドル廻轉係りとなり、橋本君は時計係りとなる。——練習後、自分の活動器械の三脚の一つが床上に辻つて、一時は皆驚いたが、すぐ之れは大工に直して貰つた。日本隊の練習後、自分はデアデラス中佐と2人きりで、ペル1隊のプログラムと人員部署について懇談を遂げた。

米國半スコンシン大學のステビンズ教授が單獨で日食觀測のため來秘、本日サラベリ港に上陸、奥地に向つた由。

6月5日(土曜日)

朝は曇りであつたが、午後からは美しく晴れて、天気は之れで定型となつた！ ロタルデ大佐の豫言が當るのらしい。皆喜色が顔に現はれてゐる。自分は朝9時トルヒ1ヨ市の日本人小學校へ行つて、職員生徒一同に來る日食の話を簡單になし、それから十時にワンチャコに着いた。10時半にペル1隊の全員のために觀測分擔の相談をまとめた。皆々大なる希望を持つて、午後には練習をやることを約束をする。

午後、米國隊のフィシャ隊長と婦人3人（ワシントン海軍天文臺のリウイス夫人、フィシャ夫人、畫家ミス・ジョンソン）とが此のワンチャコに來着した。日秘兩隊各人に挨拶の後、フィシャ氏は早速この屋上に馳け上つて、ペル1隊の



フィシャ博士の多忙な活動ぶり

赤道儀を中心として、いろいろな人を立たせたり、列べたりして活動寫眞を撮り始める。始めは皆珍らしいので面白がつてゐたが、餘りにしつこいので、少

々いやがられ、又、之れによつて米國隊(或は隊長)のペル1へやつて來た目的が眞面目な研究觀測のためといふよりも、むしろ宣傳と實利のためであるらしいことが知れて來たので、ロタルデ大佐等は大に迷惑がり、ガルシヤ博士等も“吾々はホリウダのスターのやうだ”と苦笑するに至つた。實際、米國隊は“Hayden Planetarium-Grace Expedition”といふ名で來てゐるので、學術をダにした宣傳と營利のためであること明らかである。

フィシャ氏が餘りにしつこく寫眞を撮るので、16時から始める筈のペル1隊の觀測練習が少しく遅れたが、しかし、遅れても皆極めて熱心に練習をした。ロタルデ大佐が時計係り、デアンデラス中佐が號令かけ、又、プロミネンスを眼視觀測する。スワレス少佐はコロナの眼視觀測、ガルシヤ博士とダピラ君

は外部コロナの寫眞撮影、ガマラ博士はコロナの寫生、ロセンブラト、モンヘ兩教授等は陰影帶の觀測、モスタホ教授は一般氣象觀測といふ役割である。

ワンチャコの部落が日食のために漸次有名となり、人の來往も多くなるので、數日前から“Restaurante del Eclipse”（日食食堂）といふものが出来、ペル



賑ふワンチャコの濱邊

の觀測隊は毎日の晚餐を此の食堂で食べてゐる。吾々は幸ひにトルヒヨの日本人會の御蔭で觀測所内の臨時食堂で凡ての食事をしてゐるが、今日だけは珍らしい経験のためとして

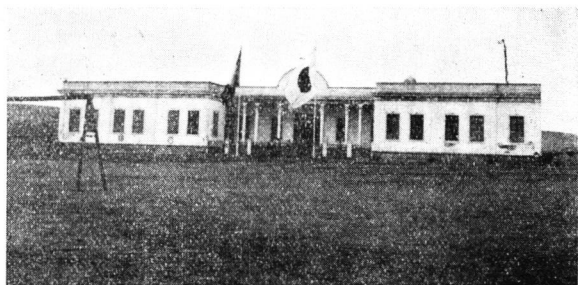
17時から5人が打ち揃つて村の此の“日食食堂”へ行つた。

夜、よく晴れたので、喜び勇んで經度の觀測をした。標準時刻はペル1隊の方でワシントンの無線報時を取つて呉れるので、好都合である。

6月6日(日曜日)

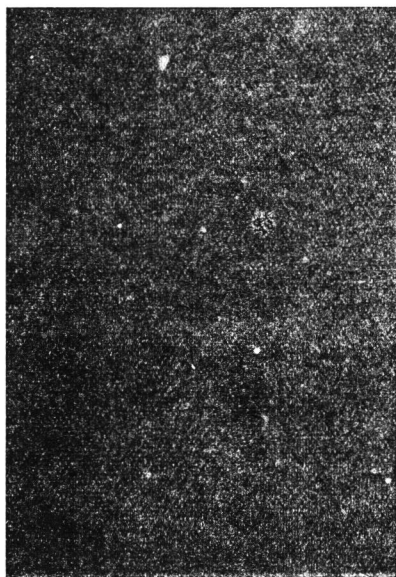
天氣は、すっかり標準型となつた！ 此のワンチャコで、吾々が如何に仕事をしてゐるか、日秘米の3ヶの觀測隊の模様や、當地官民協力の有様など、是非見て貰ひたいと思ひ、リマの藤村領事とラルコ名譽領事あてに、來觀されるやう電報を出した。

11時、日秘兩觀測隊員全部列席して、臨時觀測所の玄關に於ける兩國々旗掲揚式を行ふ。トルヒヨから音樂隊が來るし、日本人小學校生徒が來てガルシヤ氏と自分とに花束を贈られるやら中々の盛況であつた。見物人も數百人あり、村の未曾有の盛儀であ



日秘兩國の旗ひるがへるラルコ館

つた。14時から ペル1隊長 ガルシヤ博士 主催の 記念 午餐會がトルヒヨ市の Club Central で開かれ、吾々3人も招かれ、出席した。しかし之れは案外に時



“南十字架”星座

間がかゝり、食事を終つて観測所へ歸つたのは17時過ぎであつたので驚いた。日没の時刻に、日秘兩観測隊は又それぞれ練習をした。それから、晩には昨日の如く自分が經度の観測をやつた。尙、之れも終つて、22時頃から赤道儀臺により、試験的に星野の廣角寫眞を撮つた。一つは南十架星座、他の一つは蝎星座の南端。

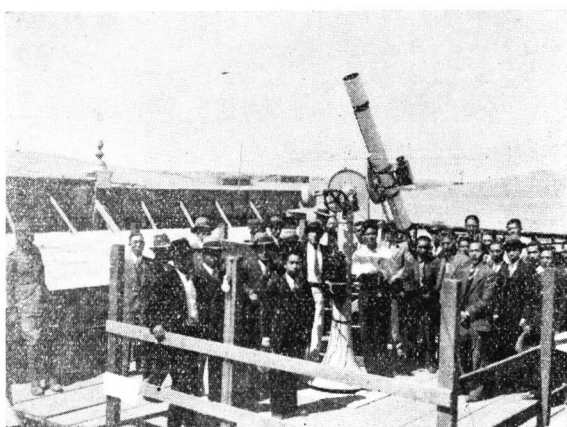
朝9時、リマのオルベゴソ氏が來訪したので、望遠レンズによるコロナの活動撮影方法を説明する。

6月7日(月曜日)

今日も天氣は快晴!“少し良過ぎる”と言つて、却つて明日のために心配する人があるくらゐ。9時、トルヒヨ市 San Juan 中學校教師の來宿を求め、コロナの眼視観測用紙を渡して協力を要請した。

9時半、宿を出發、ワンチャコに行き、いよいよ明日に迫つた日食観測のため、準備と練習を勵む。リマから岸、早坂、池山、榊、伊集諸氏も來着。

夜も快晴天を利用して經度観測をした。万



遠近より夥しき來觀者

事 O. K. !!

6月8日(火曜日)

思はずも早く眼がさめ、皆、外に出て、氣にかゝる空を眺める。空は寧ろ晴れてゐない。しかし吾々は心配しない。之れが日高氏の言ふ、“定型的”の空なのだから、大きい望みを持ちつゝ9時にはワンチャコに行く。連中、チャンチャン遺跡あたりから海の彼方を見ると、沖の方に例の低い層雲がある。山の手は積



雲、之れも型の通り、

今日は朝から、トルモヨ全市も浮き立つてゐる。幾千の人々がワンチャコへと急ぐ。軍隊も全部出動して、20軒

此 の 日 の 群 集

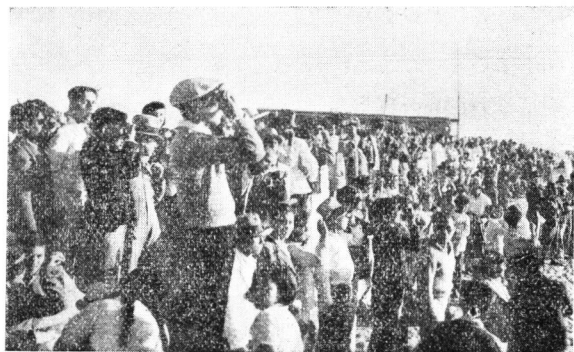
の途中演習をしつゝ、

ワンチャコまで警備に来てくれる。人も馬も、車も、皆ワンチャコへ、ワンチャコへ!

観測所でも、今日は早くから皆緊張してゐる。玄關を嚴重に警戒して、観測に關係ある人々と、その他、特別な來賓でなければ絶対に入場させないことにした。

天氣は午後早々青空が見え始め、14時頃からは理想的の快晴となつて了つた! 正に典型的の天氣模様である! 最後まで天氣を心配し續けたロセンブラト教授も、之で全く安心したらしい。15時頃玄關前庭に机や腰掛けを持ち出して、陰影帶観測の陣を張つた。

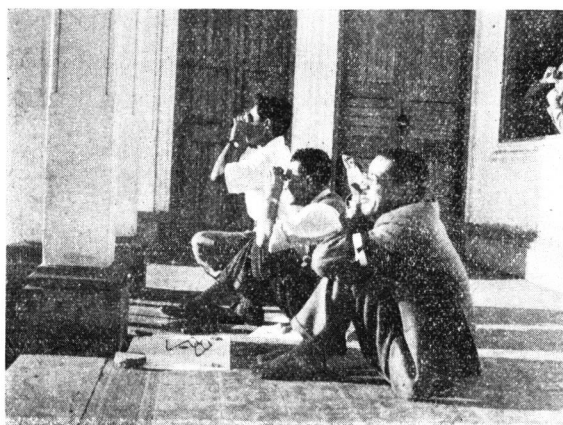
さて、愈々16時より第1接觸の観測部署につき、橋本、ロタルデ兩氏の時刻読み勇まし



太陽が欠ける! 欠ける!!

く、同15分、正しく接觸現象が観測された！ 米曆による豫報より数秒おくれてゐるが、之れは始めから豫想に近いのである。

空の心配は最早や絶対に無い。風も微かである。部分食が進むので、場外の一般観衆も、どよめきつい、色ガラスで太陽を見つめる。自分は、ペル1隊を



來 賓 の 人 々 も

訪れて、最後の検閲をなし、17時0分から再び自己の部署についた、暗さが増す。

17時10分過ぎから皆既食観測のプログラムに入り、時計係の呼び聲の中に一同緊張する。自分はファインダーで欠け行く太陽を見張りつい、ペイリ粒の最

後が消えるのと同時に“Go!!”を叫んだ。同時に器械は活躍する。皆既時間は2分半、此の間は只皆沈黙の操作。幸ひに何の故障もなく、17時20分過ぎに、第3接觸と同時に太陽の眩しい光りが見えた。之れで全部の仕事は終り、感激と、喜悅、日秘兩國語で夫れ々々萬歳が叫ばれる。吾々観測隊員一同も、求められるまゝに、観測所の玄関に出で、群がる大衆と共に萬歳を叫んだ。

柴田、堀井兩君は、17時半、大急でコロナ寫眞の乾板を持つたまゝ、トルヒョに歸つた。豫め約束して置

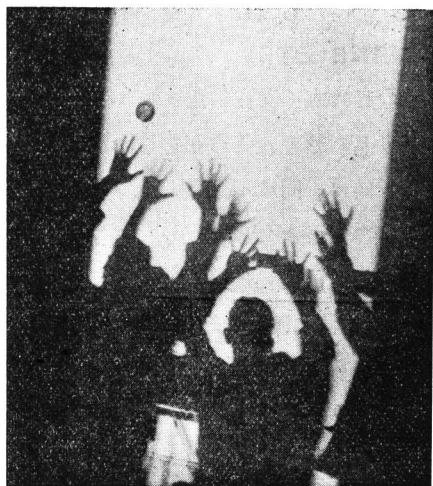


ア_マ_チ_ユ_ヤ_の_人_々_も

いた寫眞師の暗室で、なるべく早く此れ等を現像するためである。其の他一同は、器械等を一通り片づけた後、19時にトルヒヨに歸宿。21時から自分は日秘兩觀測隊員及び官民有力者約30名を名譽領事館に招いて、祝宴を張つた。領事館は今夜屋内屋外に美しい電飾をした。コロナ寫眞は皆見事に現象されたので、來賓一同にも之れを紹介し、早速プリントを始めた。

6月9日(水曜日)

朝8時、約束により新聞記者たちへコロナ寫眞のプリントを一枚づつ與へ、9時には又ワンチャコに行つて諸器械の荷作りを始める。



觀 測 成 功、萬 歳

14時にはトルヒヨの聯隊長 B 中佐の招宴があり、18時にはトルヒヨ大學でガルシヤ博士の學術講演、又、20時から同大學總長 Meave 氏の祝宴があつて、此等何れにも吾々は招かれて居たが、荷作りに忙殺されて、皆止むなく欠席した。此の日歸宿したのは21時であつた。

6月10日(木曜日)

今日も朝9時からワンチャコに行き、先づペル 1 隊の赤道儀の片付けを手傳つた。午後は日本側の荷作りも完了したので、14時には歸宿した。20時から H 氏の招きを受け、吾々仲間だけで祝宴を張つた。

6月11日(金曜日)

朝10時、日高氏の案内でチャンチャンの遺跡を見に行つた。此の有名な遺蹟附近を、今まで約3週間、毎日ワンチャコへの往復途上に、通過してゐただけけれど、一度もゆつくり見る暇が無かつたのであるが、今日始めて一時間ほどでザツと見たただけけれど、大に驚嘆した。

11時半から日高氏同道、自分は名譽領事の公式車に乗り、トルヒヨの大學總長 J. Meave 氏、聯隊長 D. F. Bolognesi 氏、縣知事 A. Sologum 氏及び市長 E. Iturri

氏を歴訪し、當地滞在中の厚誼を謝し、又、別れの挨拶をした。

16時、リベルタ州の日本人會館に招かれ、自分は日食に関する講演をした。又、20時からは日本人會長小出氏宅に招かれ、晚餐を饗せられた。

6月12日(土曜日)

今日は永く滞在したトルヒーヨを出發する日である。午前中、居室内で手まはり品の整理と荷作りをし、又、散髪などする。正午に御別れの午餐。

13時に一同は飛行場に行き、豫定の如く13時半發のフォセト機に乗る。乗り合ひは吾々3人のほか、橋本、佐藤、岸父子の諸氏で、全部が日本人である。又飛行機は有名な第17號機で、先きにブエノスアイレスまで直飛したもの、ボデ^イの兩側には其時の大飛行の記念として種々のマークが張られてある。當地官民有力者や日本人會の人々多數に見送られて、首尾よく出發する。日高氏は“ニウヨークへ出發の時に、又此の所で御目にかゝりませう！”などと言はれる。

機上で左右の景色の寫眞など撮りつゝ飛ぶ。始めは晴天であつたが、チンボデを過ぎてからは白雲の上を飛び、直飛で、15時50分にリマに着、ホテル・ボリゾ^イに入つた。

聞けば、ノルエ^イ丸が今日カヤオに入港中であると言ふので、柴田、堀井兩君は岸氏に連れられて早速同船を訪ひ、クロノメータを依託し、尙ほ船長始め高級船員たちをリマへ案内して來たので、20時から此等の人々と共に晚餐を共にした。吾々の器械類は近日又々サラベリ港で此の船に積み込み、神戸に直送する筈である。

南米ペル^イより花山へ留學生2人來朝

先般、本會長京都帝大教授山本一清博士が南米ペル^イ國へ皆既日食觀測に出張したことが機縁となり、今回國際學友會の援助によつて彼國リマ市サンマルコス大學生2人が天文學研究のため花山天文臺に來朝することとなつた。直接に山本博士の指導を受ける筈。